「日本の文化と繊維」

伝統楽器と繊維一筆、琵琶、三絃の糸

小 篠 洋 之

日本の伝統楽器を語るには、中国大陸からの2つの源流を、先ず知っておかねばならない。図1に示すように、今から約1200年前、奈良時代後期(天平)に、朝鮮半島を経由して渡来したのが箏・琵琶であり、一方、今から約400年前、室町時代後期(永禄年間)に、中国の福建省より琉球(沖縄三線・蛇皮線)を経由して、泉州堺の港に渡来したのが、三絃のはじまりであると言われている¹⁾。

因みに、奈良正倉院に伝わる楽器は70点を数え、その種類もきわめて多い²⁾。即ち、琴(きん)・瑟(しつ)・箏(そう)・新羅琴(しらぎこと)・和琴(わごん)

図1

・七絃琴・箏篳(くご)・琵琶・五絃琵琶・阮咸(けんかん)等、いわゆる絃楽器には、すべてその発音源であるところの〈絃〉が、必然的に存在することは、まぎれもない事実である。しかもそれらの絃類は、褐色、鉛色になってはいるものの、肉眼でも鮮明にうかがい知ることが出来る。その素材はすべて蚕糸による生糸(RAWSILK)であり、それには繕り(然り)がかけられている。

次に興味深い点は、繕り方向と、その構成である³⁾。図2に示すように、先ず繕り方向には右と左との2種類があり、それぞれ右繕り、左繕りと呼称している。そして日本の絃楽器に使用されているものは、図2-エの通り、箏の絃をはじめとして、この右繕りが主流であると言って間違いはない。しかしその反対の左繕りの絃も実在していることが、前述の正倉院にある新羅琴を見てはじめて知り、一瞬はっと驚いた。その後ある機会に、韓国へ出向き伽倻琴(かやぐん)と、その絃の調査研究をしたところ、昔も今もすべて3子左繕りであると確認出来た(図2-ウ)。

そして、この3子左繕りと4子右繕りとの相違、特性、音色などの考察を更にすすめると、図2の断面形状の示すように、3子と4子とを対比したとき、3子は120度(ほぼ3角形)、4子は90度(ほぼ4角形)で、3子が4子よりも物理的にすぐれているし、又そのために、きわめて安定した自然の繕りがかけられることも事実である。ところが不思議なもので、事、音色に関しては、日本人好みの、少しほやけた感じではあるが、実に、はぎれのよい音⁴⁾、しかも高い調子にも耐える点では、この4子繕りにまさるものはない…との評価をされている。なお、右繕りと左繕りとの優劣は、ほとんど見出し難く、ただ、習慣・演奏の相違や、例えば、爪(つめ)・掬(ばち)

Traditional Musical Instruments of Japan and Fibers

—the Strings of the Koto (a horizontal harp), Biwa (a lute with a bent neck) and Shamisen (a three-stringed instrument).

著者紹介 HIROYUKI OZASA

株式会社 鳥羽屋 代表取締役

著者は、邦楽器系製作において、昭和54年には国の無形文化財選定保存技術保持者に認定され、さらに本年4月には文化財保護功勞により勲五等瑞宝章を受章された。趣味は茶の庭、竹工、木工。繕りの構成、伸張と音色との関係、「サワリ」の工夫など、邦楽器の絃の特徴を解説していただいた。

図2

に対する抵抗感の程度ぐらいのようであって、さほど問題点はないようである。

次に、琵琶の絃で最も特徴的と言えることは、琵琶独特の、ピンという高い調子の余韻を出すために、その絃りは極度に強くして、しかも伸張を数回繰りかえしすることを特に留意している。そして演奏に於ては、絃り山を琵琶の撓で、すり音の変化も微妙にとり入れられているのには、まことに、おそれいるところである⁴⁾。総じて、琵琶の演奏は、撓でもって、打つ・たたくといった感じであって、われわれの絃にとっては、まさに、きびしい試練の連続である。

さらに、三絃では、その最も細い三の糸の2倍(重

図3

量)が二の糸で、二の糸の2倍(重量)が一の糸であり、それぞれ倍率計算が精度高く組み合わせがなされている。これに対し、図2-イ沖繩三絃(蛇皮線)では、三の糸の1.5倍(重量)が二の糸で、二の糸の1.5倍(重量)が一の糸である。このように、同じ三絃であっても倍率計算を異にするのは、やはり何と云っても、皮の違いは勿論のこと、音の高さ、音の幅に関することで、それぞれの個性は、素晴らしい。そして、三絃の糸は、太・細の種類は多く、その数は100を超える。長唄・地歌・清元・常盤津・小唄・歌澤・端唄・浴曲・新内・淨瑠璃・浪曲・民謡・胡弓などにより、一の糸・二の糸・三の糸の組み合わせが、太・細とりまぜて微妙に変化してくる。その内で、一の糸と二の糸とは、絃りの構成は4子であるのに対し、三の糸(図2-ア)のみ1子(片絃)であるのは、きわめて不思議である。それについて、たまたま、東京芸術大学邦楽科の専門教授のご要請もあり、一の糸・二の糸と同じく、4子絃で、しかも全く同じ太さ(重量)の三の糸を試作し、演奏を行い実験した。はたしてその結果は、全然期待していた音は得られず、三の糸のみが1子片絃でなければならない理由が知り得た。まさに、固有音の追求はこのようなことと思われる。そして、すぐれた演奏家や楽器づくりにたずさわった先人の方々の工夫の積み重ねには、頭の下る思いである。

なお、三絃について、忘れてならないことがもう1つある。おそらく17世紀(江戸時代中期)のころから「サワリ」の工夫が発生した²⁾。図3に示すように、一の糸の振動に、特色ある高次倍音を強調して、添える工夫である。中国・琉球の三絃にはみられない。日本の三絃の独自の工夫であり、ピンという、しびれたような独特の音色は、これによって生じる。その仕掛けは、図3に示すように、乳袋の表面に、微かな凹凸(サワリの谷・サワリの山)がつくられていること、および、一の糸が

上駒に乗らず、棹の末端の角に、食いこむようになって
いることである。一の糸（開放絃）が振動すると、その
上端部分が、サワリの山に触れ、基音と同時に高次倍音
が鳴る。二・三の糸を弾いた場合にも、一の糸は共振を
起し、やはり、サワリの効果があらわれる。このサワリ
の効果をよりよくするために、一の糸を繕る時には、特
に伸張度を強くして、より一層弾性アップを心掛け、細
心の注意を払っている。因みに、演奏曲の内、第一の聞
きどころ、また、聞かせどころと、俗に言われている
〈サワリ〉は、実は、このサワリである。なお、このサ
ワリは、雅楽琵琶以外の平家・薩摩・筑前琵琶にもあり、
これらの琵琶のサワリに、三絃が影響をうけたものと言
われている²⁾。

ところで、ご承知の通り、昭和35年頃より合繊のナイ
ロン絃・ポリエステル絃が、序々に出まわるようになっ
た。これを絹絃と対比してみると、

	絹 絃	ナイロン・ポリエステル絃
箏	30%	70%
琵琶	100	0
三絃	90	10

因みに、釣用テグス・医療手術用縫合糸は、30数年前、
われわれの楽器絃と全く同一の、繊維素材（特殊生糸）

であった。

繊維素材としての絹絃の歴史はきわめて古く、繕りの
構成、強弱、伸張度により、常に極上の音色を追求して
止みません。

駕籠（かご）に乗る人、担ぐ人

そのまた、草鞋（わらじ）を作る人⁵⁾

あくまでも、

その、よいわらじをつくる人でありたいと考えて
います。

参考文献

- 1) 浅香 淳, 邦楽百科辞典, 昭59.11.1, 音楽之友社.
- 2) 正倉院事務所, 正倉院の楽器, 昭42.10.25, 日本経
済新聞社.
- 3) 小篠洋之, 伶楽・古代楽器の復元と演奏, 昭62.3
,13, 国立劇場.
- 4) N H K ラジオ, 録音構成一絹の音, 昭50.2.11,
NHK.
- 5) 高橋秀雄, 伝統芸能の集積回路, 平4.5.2, 実業
之日本事業出版部.

(平成6年11月8日受理)

正会員・学生会員会費払込みのお願い

会費をお払込み願う時期になりました。お手数でも事務局から送付いたします振替用紙を
ご利用のうえお払込みくださいますようお願いいたします。（銀行振込みの場合には会員番
号・氏名を必ずご連絡下さい。）

領収書の発行を省略させていただいております。郵便局でご送金の際発行される振込票を
各自保管下さいますように。なお当学会の領収証が必要の方には、ご連絡いただければ従来
通り発行致します。